

保育者養成課程における絵本の活用について

山下京子*

(2019年1月9日 受理)

The Use of Picture Books for the Nursery Teacher Training Class

Kyoko YAMASHITA*

“Course of Study for Kindergarten”, “Nursery Childcare Guidelines”, and “Centers for Early Childhood Education and Care Guide” were revised in the spring 2017. One of the key points of these revisions is that early childhood education will be offered at all early childhood education and care centers. Around the same time, the Department of Child Education and Psychology at Hiroshima Jogakuin University was reorganized and converted to the Department of Child Education in 2018, drastically changing its curriculum.

This paper reports the exercise contents of my class “Clinical Psychology”, and reviews educational practices at other universities. What is the effect of the use of picture books in the class for students? They may reconsider themselves after storytelling. We should enhance students’ language activities for the purpose of ‘rich language world’.

Keywords: picture books 絵本, storytelling 読み聞かせ, nursery training schools 保育者養成校, language activities 言語活動

1. はじめに

幼児教育心理学科は、2018年度改組により、カリキュラムの変更を行い、児童教育学科と名称変更した。新カリキュラムでは、保育者養成と小学校教員養成に特化し、「認定心理士」や「カウンセリング実務士」の心理学系資格に関連する科目を削除した。筆者の担当する「臨床心理学」も削除された科目の中の1科目である。「臨床心理学」では、心理系資格科目履修者のみを受講対象とした科目ではなく、保育士課程の「保育士資格取得科目ではないが、学校独自の科目として開設されている科目」のひとつである。受講者数は20名～30名であり、今年度の受講者数は31人であった。「臨床心理学」では、絵本を題材として授業を行って来た。本稿では、「臨床心理学」のシラバスを紹介し、絵本を教材として用いることの効果について検討すること、絵本を教材として活用している先行研究を紹介し、2018年4月1日から施行された新しい幼稚園教育要領（平成29年文部科学省告示第62号）、保育所保育指針（平成29年厚生労働省告示第117号）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年内閣府・文部科学省・厚生労働省告示第1号）に従い、本学の新カリキュラムにおける担当授業の中で、絵本を教材として取り入れる可能性について検討することを目的とする。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

2. 「臨床心理学」の授業実践

「臨床心理学」では、テキストとして『絵本に学ぶ臨床心理学序説』（村瀬喜治・村瀬留美子、2013）¹⁾を使用した。2018年度の「臨床心理学」のシラバスの概要を表1に示した。表1の授業計画の各回において、シラバスに掲載している絵本名を表記している。これらすべての絵本（『リトルターン』は文庫）は、テキストである村瀬・村瀬(2013)により紹介されたものである。シラバスには載せていないが、テキストで紹介されている『100万回生きたねこ』（佐野洋子作・絵、1977）²⁾も生きることと死ぬことをテーマにした授業の回に読み聞かせを行っている。また、シラバスには載せていないものの、授業中に追加して紹介する絵本として、『やっぱりおおかみ』（ささきまきさく・え、1973）³⁾『めっきらもっきらどおんどん』（長谷川摂子作 ふりやなな画、1985）⁴⁾『おやすみなさいフランシス』（ラッセル・ホーバンぶん ガース・ウィリアムズえ まつおかきょうこやく、1966）⁵⁾などがある。

授業の基本的な進め方は、次の通りであった。表1では省略しているが、シラバスに授業回ごとに事前学修と事後学修としての課題を載せている。まず、前回授業の事後学修または授業回の事前学修の課題について学生同士でグループ討議の後、各グループの代表者が全員の前で発表を行う。その後授業回のテーマに関連した絵本の読み聞かせを筆者が実施する。授業回の事前学修により、学生はすでに絵本を読んで内容を把握している。受講者数の関係で、書画カメラによりスクリーン上に絵本を映し、読み聞かせを行った。毎回ではないが、読み聞かせを行った絵本について感想を個人発表やグループで話し合った後発表する。その後、テーマに関する講義を行い、シラバス記載の事後学修の課題について説明する。

表1に示した3つの到達目標には、それぞれルーブリック評価を設定している。到達目標②の「臨床心理学的観点から、絵本などの児童文化財について、子どものこころの発達と関連させて、解釈することができる。」のルーブリック評価は、「Learning Effort 1：紹介された絵本を読み、感想を文章化できた。」「Learning Effort 2：紹介された絵本を題材に、テーマについてグループで討論できた。」「Learning Effort 3：絵本とこころの発達を関連させて、自分の意見を口頭と文章で発表することができた。」「Learning Effort 4：絵本などの児童文化財を取り上げ、子どものこころの発達と関連させて解釈することができた。」であった。テキストで紹介していないが授業で取り上げる絵本の中の『やっぱりおおかみ』³⁾は「自分とは何か」「アイデンティティの心理学」「いじめの心理学」「自閉症スペクトラム」「発達障害の世界」などのテーマと関わっていると考えられるので、授業最終回で紹介することが多く、その後これまでの授業の振り返りとまとめを行っている。学生には課題として感想を書くように求めており、「オオカミ」の生き方を肯定するものがほとんどであるが、中には自分を重ねて「オオカミ」の孤独な心情を吐露するものもあった。『めっきらもっきらどおんどん』⁴⁾は、「ファンタジーの世界」のテーマで紹介し、子どもの遊びについての心理学的な見解等も解説として加えている。『おやすみなさいフランシス』⁵⁾は、子どもの日常生活を描いている絵本であり、子どもにとって眠りの世界がどのような心理的意味を持っているかを解説している。学生たちの授業感想では、絵本を教材として使うことに対して、授業内容について興味・関心をもつことができた、いろいろな絵本を知ることができて役立ったなど、肯定的な意見が多かった。「臨床心理学」の理論を、絵本を教材とすることでわかりやすく伝えることができたと思われる。一方で、授業担当者として気にかかることは、学生たちが絵本や児童文学作品に対して興味や関心を抱いて

表1 「臨床心理学」のシラバスの概要

「臨床心理学」 2年生対象後期 2単位	
授業形態	
①講義(知識伝達)	④ディスカッション、ディベート A:グループワーク有り B:発表(プレゼンテーション)有り
授業目的	臨床心理学の基礎的知識を習得し、臨床心理学的観点から、無意識の世界について考察する。フロイト、ユングを中心に、いくつかの代表的なパーソナリティ理論について概観し、臨床心理学的な人間理解の方法を学習する。また、絵本を題材として取り上げ、子どもの心理発達との関連から考察を加える。
到達目標	
①	①こころに関するフロイトやユングの理論を理解し、無意識の世界について、心理学的に探究することができる。
②	②臨床心理学的観点から、絵本などの児童文化財について、子どものこころの発達と関連させて、解釈することができる。
③	③日常生活の事象について、臨床心理学的な視点から思考することができる。
授業計画	
1	オリエンテーション・無意識の世界
2	フアンタジーの世界 「かいじゅうたちのいるところ」(モーリス・センダック作 神宮輝夫訳、富山房)
3	自分とは何か 「フレデリックちよとかわったのねずみのはなし」(レオ＝レオニ作 谷川俊太郎訳、好学社)
4	アイデンティティの心理学
5	喪の仕事 「リトルターン」(ブルック・ニューマン作 リサ・ダークス絵 五木寛之訳、集英社)
6	うつ病 「わたしのいいとこ」(松谷みよこ作 味戸ケイコ絵、偕成社)
7	はじめの心理学 「わかってほしい」(MOMO作 YUKO 絵、クレヨンハウス)
8	虐待の心理学 「ちよときて」(瀬川康男作、小学館)
9	心理アセスメント・投映法 「たいせつなこと」(マーガレット・ワイズ・ブラウン文 レナード・ワイズガード絵 内田也哉子訳、フレーベル館)
10	自閉症スペクトラム 「天使と話す子」(エスター・ワトスン作 山中康裕訳、BL出版) 「自閉症者からの紹介状―色と形と言葉に映した私の世界」(月文麻作、明石書店)
11	発達障害の世界 「おこだでませんように」(くすのきしげのり作 石井聖岳絵、小学館)
12	犯罪心理
13	災害支援 「かばくんのきもち―絵本で学ぶストレスマネジメント」(富永良喜作 志村治能絵、遠見書房)
14	生きることと死ぬこと 「はるにれ」(姉崎一馬作、福音館書店)「アンジュール―ある犬の物語」(ガブリエル・パンサン作、BL出版) 「おじいちゃん」(ジョン・バーニンガム作 谷川俊太郎訳、ほるぶ社)「わすれられないおくりもの」(スーザン・バーレイ作 小川仁央訳、評論社)
15	まとめ・テスト
授業成果	臨床心理学的なものの見方や考え方ができるようになる。
テキスト	「絵本に学ぶ臨床心理学序説」(村瀬喜治・村瀬留美子、ナカニシヤ出版)

いるにもかかわらず、自ら図書館に行ったり、書店に出向いたりするなどの積極的な姿勢が見られないことである。どのように学生たちの興味・関心を積極的な学修行動に反映させるかが今後の課題として残った。

3. 絵本を教材として活用した授業の事例

絵本を授業で活用した事例としては、保育内容（言葉）で扱っているものが多い。例えば、本田(2017)⁶⁾は、保育内容（言葉）の15回の授業の後半に幼稚園における絵本の読み聞かせの実習を行い、12名の学生を対象に幼稚園教諭としての資質・能力として「幼児理解力」「保育内容の展開力」「保育評価・改善力」「保育者効力感」に関する3回の質問紙調査を実施して、授業効果を測定している。また鈴木(2016)⁷⁾も、保育者養成課程2年生2クラス（計104名）を対象とした保育内容（言葉）の授業実践を報告している。鈴木は、学生に「いのち」または「どうぶつ」に関連する絵本の選択、魅力の紹介、絵本の読み聞かせを行わせ、最も子どもたちに読ませたい絵本を選択するというルールで絵本ビブリオバトルを実践した。両クラスにおいて第1位となったのは、『ずーっとずっとだいすきだよ』（ハンス・ウイルヘルム えとぶん 久山太市やく, 1988)⁸⁾であったことから、国語教材として採用される文学的な作品に惹かれる傾向を指摘し、絵本と国語教科書を比較している。鈴木は、保育者を目指す学生が注意すべき点として、国語教科書と同様の視点で言語を重点化して絵本選択を行ってしまうことであると述べている。すなわち、対象となる子どもの年齢が幼ければ幼いほど、絵本における絵の重要性は増すことから、絵本選択は、子どもの発達状況に合わせることで、絵本の魅力である絵について注目することが必要であろう。

峰本(2017)⁹⁾は杉本(2016)¹⁰⁾を参考に、授業「言語指導法Ⅰ」の15回のうちの4回を用いて「絵本探求」の授業実践を行っている。保育者養成課程の1年生129名（3クラス編成）に対して、あらかじめ選定された6冊の絵本を読み、その中から自分が探求したい絵本を一冊選択し、3～4名のグループになって絵本を探求しまとめたものを発表するという授業実践を行った。峰本によると、絵本を探求する観点は、①作者 ②絵本が作られた背景 ③絵本のストーリーの特徴・魅力 ④絵本自体の特徴・魅力（絵の描き方、本としての作り方など）の4点である。4回の授業終了後に授業に対する感想を自由記述で求め、テキストマイニングにより分析を行っている。その結果、絵本を読むことで様々なことを思い、気づき、調べることでさらに絵本への関心を深めていることが示された。

三好(2017)¹¹⁾は、授業「保育内容の研究（言葉）」の受講者3・4年生123名を対象として、2、3名で1組となり絵本に関して学びたいことについてテーマ設定をし、絵本を選択して調べたことをまとめて発表するという演習を行っている。15回の授業のうち7回を発表に充て、全発表件数62件、使用された絵本総数は59冊であり、学生の絵本への興味・関心が多様であることが示された。

このように、学生にとって、絵本を読む、選択する、調べるという活動が、学生自身の興味・関心を広げることにつながっていると考えられる。学生に多くの絵本に触れてもらうための工夫をしている養成校もある。例えば、絵本ノートの作成である。

保育者養成課程の学生に対して、絵本ノートの作成を指導している事例がいくつか報告されている。青嶋(2015)¹²⁾は、保育系学生に対して1年間に100冊の絵本の記録を取り提出するという課題「絵本100冊ノート」を出している。青嶋によると、その記録の内容は、作品名・作者・挿絵画家・出版社・出版年・刷数・絵本の要旨・感想の8項目を必須とし、半期ごと50冊分を提出させている。

また50冊のうち10冊以上の昔話・民話・神話を含むという条件を付けている。青嶋は学生84名分の絵本ノートを対象として、学生が選んだ昔話・伝説・神話1007冊の分類を行った。その結果、日本の昔話・伝説では、『桃太郎』（48件）、『花咲か爺』（28件）、『猿蟹合戦』（28件）、『かちかち山』（26件）、『浦島太郎』（26件）が上位であり、日本以外のものでは、『赤頭巾』（32件）、『三匹の仔豚』（28件）、『狼と七匹の仔山羊』（25件）、『大きな燕』（24件）、『三匹の熊』（21件）が上位であった。神話を選択する学生は非常に少なかったことも合わせて報告している。

伊勢・吉村(2017)¹³⁾も、「保育内容の研究（言葉）」において絵本ノートの作成を課している。伊勢らの絵本ノートは、学生に50冊以上の絵本を選択し、題名・著者・出版社・あらすじ・感想・保育に生かすには、の6点について記入を求めている。伊勢(2018)¹⁴⁾は、絵本ノートの作成がしやすいように、記入方法の改善やモチベーションを高める工夫を行っている。また、授業開始時に学生の幼少期の絵本環境についても調査しており、「家庭で絵本を読んでもらう機会が少ない」と回答した学生は34人（129人中）であった。伊勢によると絵本体験の少ない学生は絵本ノートの作成への動機づけも低いことから、絵本ノートに取り組みやすいように工夫することだけでなく、絵本に対する関心を高めるための工夫も必要となってくるだろう。絵本体験の少ない学生が、絵本への関わりを積極的に持つようになるには、まずは絵本を読むことからということかもしれない。

4. 学生の絵本との関わりや絵本への態度

保育者養成課程の学生の絵本への態度形成は非常に重要であると考えられる。文部科学省¹⁵⁾によると、新しい幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容で次の2点を充実させた。

「1 狙い（3）日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」「3 内容の取扱い（4）幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」（下線部：主な改訂箇所）（p. 22）

幼児の言葉への興味を促し、豊かな言葉の世界を育むためには、保育者自身が絵本を通じて豊かな言葉の世界を構築してこそ、「環境を通しての教育」を実践できるのではないかと考えられる。保育者養成校においては、すでに紹介したように、絵本を教材として活用し、学生の言葉に対する感覚を豊かにしようと試みている。

平山(2017)¹⁶⁾は、保育者養成課程の4年生182人を対象に、絵本にどのように関わっているかという「絵本関与」と絵本をどれだけ知っているかという「絵本認知度」との関連を検討するために調査を行った。平山によると、「絵本関与」を測定するための質問項目は、「絵本志向」「絵本経験」「読み聞かせ志向」の3因子から構成され、各因子に4項目ずつあり、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階評定であり、「絵本認知度」測定のための項目は、クレヨンハウス社のブッククラブ「絵本の本棚」（2016年度版）の絵本リストにある52冊であり、1冊ごとに「非常によく知っている」から「まったく知らない」の6段階評定であった。また読書量を測定するために、「1か月間の読書冊数」を数値で記入を求めた。分析対象は179人で、「絵本認知度」で52冊全ての評定値を合計したものを「絵本認知度A」、回答者集団の評定平均値2未満のほとんど知られていない絵本と評定平均値5以上のほとんど知られている絵本を除く17冊の絵本の評定値を合計し

「絵本認知度 B」とした。その結果、「絵本志向」と「絵本認知度 B」、「絵本経験」と「絵本認知度 B」に高い相関があり、絵本が大好きで絵本をもっと読みたいという気持ちや、子どものころに絵本によく接していることは、絵本をよく知っていることとの間に関連があることがわかった。絵本の読み聞かせが大好きで、読み聞かせをたくさんしたいという「読み聞かせ志向」と「絵本認知度 B」との相関は、「絵本志向」や「絵本経験」に比べると高くはなかった。このことについて、平山は絵本の読み聞かせに気持ちが向くことが必ずしも絵本を知ることと関連しないことの表れではないかと考察している。

平山(2018)¹⁷⁾は、「絵本関与」や「絵本認知度」が学年進行とともにどのように変化するかを明らかにするために、保育者養成課程 1 年生215名、2 年生209名、3 年生204名、4 年生215名の計843 名を対象に調査を行った。その結果、「絵本志向」は 4 年生だけが他の学年よりも有意に低くなっていた。「絵本認知度 A」は 4 年生が他の学年よりも有意に高く、「絵本認知度 B」は、1、2 年生の差はないが、学年が上がると有意に高くなることがわかった。平山によると「絵本志向」の質問項目は、「私は絵本をもっと読みたい」「私は絵本についてもっと勉強がしたい」「私は絵本が大好きである」「私は絵本の読み聞かせについてもっと勉強がしたい」であった。平山は、4 年生の「絵本志向」の低さについて、ほとんどの実習や授業を終えていることを挙げ、殊更に絵本を志向するような回答をしなかったのではないかと考察しているが、質問項目の内容を見る限り、むしろ、保育現場における絵本の活用について意識が向いているのではないかと推測される。

佐野(2018)¹⁸⁾は、保育者志望の短期大学部 1・2 年生と大学 2～4 年生の553名を対象に、絵本に対する意識や経験、絵本に関する知識・技術、記憶に残っている絵本などを調査している。佐野によると、現在の絵本に対する意識に関する質問では、絵本に関して積極的に関わりたい、学びたいという気持ちを持っており、絵本に対して肯定的であること、幼少期の豊かな絵本体験が絵本に関する知識や読み聞かせの技術に関する自信の有無に関係していることが明らかになった。また、「幼少期に読んでもらった記憶のある絵本」の自由記述では811件の回答があり、『ぐりとぐら』（中川李枝子作・大村百合子絵、1967）¹⁹⁾（シリーズ含む）が68名、『はじめてのおつかい』（筒井頼子作・林明子絵、1977）²⁰⁾ 42名、『はらぺこあおむし』（エリック・カール、1976）²¹⁾ 31名であった。佐野によると「好きだった理由」として、①絵本の絵・内容・登場人物の印象、②大人に読んでもらった記憶、③繰り返し読んでいたことの 3 つに大別された。佐野は、保育者が幼少期の子どもとその保護者と直接かかわり、絵本の楽しさや絵本を通した親子のかかわりの大切さを伝えることのできる立場にることから、保育者養成校では絵本が子どもに与える影響について伝えることが必要であると考察している。

平山や佐野の研究結果では、学生の幼少期の絵本体験がその後の絵本への関わり方や態度に影響を与えることが示された。このことから、保育者が乳幼児期の子どもの対して、どのような絵本の世界観を持って、保育環境を構成するかによって、子どもの言葉への興味・関心の幅を広げたり、深めたりすることにつながることを、さらに小学校との接続において、「5 歳児修了時までには育ってほしい具体的な10の姿」の一つである「言葉による伝え合い」（文部科学省¹⁵⁾）を可能とすると考えられる。

5. 保育現場と学生における絵本の選書

保育現場では、どのように絵本が選択されているのだろうか。藤岡・伊藤(2016)²²⁾は、毎日読み聞かせを行っている幼稚園の3年間の保育記録をもとに、絵本の選書傾向を分析している。藤岡らによると、3歳児・4歳児・5歳児クラスの述べ読み聞かせ回数1615回のうち担任によるもの1495回を分析対象としたところ、絵本のタイトル775のうち79タイトルの絵本が繰り返し読まれ、3歳児前半と5歳児後半で特徴的な選書傾向が見られた。すなわち、3歳児前半では、紙芝居、シリーズ絵本、園生活に関連する事柄を含む絵本が多く選ばれ、5歳児後半では昔話絵本、言葉の感覚を育む絵本のうちなぞなぞやことわざ、詩、落語など言葉の知識やことばの文化に関わる絵本であった。藤岡らは、こうした選書傾向について、3歳児前半で皆で絵本に向かう集まりの時間を楽しい時間として定着させることは、園への適応を支える重要な働きを持ち、5歳児後半で小学校への接続期であることから読み応えのある絵本を読んだり、新たな言葉に触れたりすることは重要であると考察している。さらに、明らかとなった読み聞かせの傾向を、教育課程や年間指導計画に関連づけ、3年間の子どもの育ちを見通した絵本の読み聞かせをいかに展開するかを検討する必要があると述べている。研究対象となった幼稚園は、大学附属幼稚園であり、藤岡らによると、図書室で管理している幼児用書籍は、子供向けの図鑑類を含み2888冊及び紙芝居321個、クラスごとに月刊誌バックナンバー240冊程度所蔵され、全て合わせて4000冊強が園全体の蔵書数であった。また、書籍の購入は年間を通じて可能であると述べられており、非常に恵まれた絵本環境であることがわかる。

より一般的には保育者はどのように絵本を選択しているのだろうか。片山・野口・佐藤(2017)²³⁾は、保育所における絵本選定の方法とベテラン保育士が絵本を選定する際に用いる価値観の傾向を把握するとともに、それらに影響を与える要因、すなわち価値観の形成過程を明らかにすることを目的として、公立保育所の所長6人を対象にインタビュー調査を行っている。その結果、絵本の選書が個人の好みに大きく依存していることや、限られた予算の中で選書が行われていること、さらに、特定の出版社への肯定的イメージが影響を与えていることが明らかになった。個人の好みに合致した絵本とは、片山らによると、自分が気に入っていたりぜひ読み聞かせたいと考える絵本や、保育士自身や園児の親世代にとってなじみ深い絵本、子どもの状態や季節に合わせて各保育士が取り入れたいと考える絵本であった。限られた予算の制約の中で、子どもを主体として選択している様子が伺える。

学生の場合、絵本の選択はどのように行われているのだろうか。吉村・伊勢(2018)²⁴⁾は、保育者養成課程の1年生146人を対象に、「子どもたちに身近な人間関係について考えさせたり、人の気持ちに配慮することの大切さを伝えたりするために、読み聞かせしたい絵本1冊と選書理由」を調査した。吉村らによると、「友達関係」に関連した絵本を挙げた学生が57人おり、挙げられた絵本は43冊であった。1位が『そらまめくんのベッド』(なかやみわ, 1999)²⁵⁾(学生7人が選択)、2位が『くれよんのくろくん』(なかやみわ, 2001)²⁶⁾(学生4人が選択)であった。学生の選書理由としては、友達への優しさ、譲り合いなど、互いを思いやることの大切さを感じ取ってほしいや、人それぞれの個性を認めてほしいなどが多かった。吉村らは、特定の図書に偏ることなく、学生たちが独自の感性で選書していると述べている。

八木(2018)²⁷⁾は、授業「保育内容の研究(言葉)」を履修する1年生84名を対象に、授業でその学生が読み聞かせを担当する際に選択した絵本の選書理由を調査している。八木は、選書理由を、聞

き手に求めるもの、絵本に求めるもの、読み手に求めるものの3つの観点から、聞き手である幼児の日常生活や行事、発達などと関わらせた理由（A類）、絵本の絵や文章などと関わらせた理由（B類）、読み手である学生の読書経験や読後感想などと関わらせた理由（C類）に分類した。八木によると、A類4名(4.8%)と最も少なく、B類44名(52.4%)、C類36名(42.9%)であり、分析的に捉えている理由は少なく、印象重視という結果であった。八木は、授業において、実際の保育者がいつ何のために読み聞かせを行っているかを理解させることや、絵本を分析する観点や方法を指導することが必要であると考察している。

橋村(2018)²⁸⁾は、保育者養成課程の学生が保育実践において乳幼児に触れさせたいと考えている絵本を調べ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」のうちの(9)「言葉による伝え合い」を可能にする、幼児教育における言語活動の在り方について検討している。橋村は保育者養成課程2年生57名を対象に、保育実践をするにあたり乳幼児に触れさせたい絵本ベスト10を調査した。その結果、『はらぺこあおむし』²¹⁾ 32名、『ぐりとぐら』¹⁹⁾ 23名、『くれよんのくろくん』²⁶⁾ 20名が上位となった。このことから、橋村は、学生が乳幼児に触れさせたいと考えている絵本は、大半がストーリー性のある「物語絵本」で「絵本＝読み聞かせ」の傾向があると述べている。また、橋村は、「赤ちゃん絵本」「科学絵本」「知識絵本」「言葉の絵本」などの新たな語彙の獲得や言葉の概念を育む絵本にあまり関心が向けられていないことも指摘している。橋村は、いろいろな絵本の種類があることや、保育の場で乳幼児が絵本を身近に感じられる環境を提供することなどを学生に理解させることが必要であると述べている。さらに橋村は、保育者養成校の役割として、「言葉による伝え合い」の育成は学生にとっても必須の技能であることから、保育者としての言語力の育成に焦点が置かれるべきであると考察している。

6. 「乳幼児向けの絵本」「昔話絵本」「科学絵本」

厚生労働省(2018)²⁹⁾は、新しい保育所保育指針の改定の方針性として5つ挙げており、①乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実、②保育所保育における幼児教育の積極的な位置付け、③子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康及び安全の記載の見直し、④保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性、⑤職員の資質・専門性の向上であった。このように新たな保育所保育指針では、乳児や1歳以上3歳未満の幼児に対する教育を積極的に位置付けることが示されており、乳幼児向けの絵本、例えば橋村²⁸⁾の言う「赤ちゃん絵本」などに注目することが必要であろう。

笠松・上原・宇津呂・齋藤(2018)³⁰⁾は、絵本情報サイト「絵本ナビ」に読者が書き込んだレビューを分析の対象として、0～6歳の子どもの認知発達の反応を収集・類型化を行っている。笠松らは、レビュー数ランキング上位100作品のうち、0～6歳の子どもの反応が描写されている絵本44冊を選定した。笠松らは、子どもの反応を、①「じっと(0～1歳中心)」(意味は理解していないかもしれないが絵をじっと見る・音をじっと聞く)②「指さし」③「真似」④「ごっこ」⑤「じっと(2歳以上中心)」+「入り込んで+感情移入」(感情移入してお話をじっと聞く)の5分類に分け、さらに13の下位分類と「その他」により絵本を分類し、その結果と発達心理学文献での報告事例を比較している。笠原らの研究は非常にユニークであり、実際に子どもに読み聞かせをする経験の不足する学生にとっては、笠原らの研究成果を参考にして、子どもの発達に適した絵本の選択をすること

も可能であろう。特に乳児期の子どもを対象とした「赤ちゃん絵本」については、実際の子どもと養育者との関わりにより分類された絵本が何冊も挙げられている。また、笠原らの研究成果は、絵本と認知発達との関連についても示唆しており、子どもの認知発達に即した絵本を選択したり、認知発達を促進させる絵本を選択したりすることも可能であると考えられる。発達に課題のある乳幼児のための絵本選択の一助となる可能性もあるように思われる。

次に「昔話絵本」を取り上げる。青嶋¹²⁾によると、保育者養成課程の学生に絵本を選択させると昔話・伝説・神話を選択することが少ないという。すでに青嶋の100冊絵本ノートを紹介したが、50冊中10冊は昔話・伝説・神話を含むように指示しても、特に神話はほとんど選択されないという現状がある。是澤(2018)³¹⁾は、保育者養成課程の大学1年生119名を対象に、昔話絵本『三びきのやぎのがらがらどん』(ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳, 1965)³²⁾の読み聞かせを行った後で、絵本の印象や幼児に読みたい絵本かどうかなどについて調査している。是澤によると、子どものころにこの絵本を読んだことのある学生63名と読んだ記憶のない56名のそれぞれにおいて、幼児に読みたいと答えた割合は、33.3%(21名)、26.7%(15名)であり、読みたくなないと答えた割合は、17.4%(11名)、14.2%(8名)、どちらともいえないと答えた割合は、49.2%(31名)、58.9%(33名)であった。幼児に読みたいと答えた学生と読みたくなないと答えた学生の理由をもとに、是澤は、主人公であるやぎたちを肯定的に見るか否定的に見るかの違いによると分析し、昔話絵本の利点として絵によって状況が具体的にわかることや絵を手掛かりに想像を膨らませることを挙げるとともに、自分の想像を超えた描写に抵抗感を感じる場合もあると述べている。

日本の昔話ではどうだろうか。昔話絵本『かちかちやま』(小澤俊夫再話者 赤羽末吉絵, 1988)³³⁾を用いて、赤津(2008)³⁴⁾は、保育者養成課程の学生96名、通信教育課程の成人女子62名、保育士19名を対象に、この昔話を幼児に語ることにについて質問紙調査を行った。赤津の取り上げた『かちかちやま』では、たぬきがおばあさんを殺し婆汁をおじいさんに食べさせる内容となっており、残酷であるとの理由から曖昧に扱われることも多い場面である。赤津によると、学生では、「子どもに話を聞かせたい」18名(18.8%)、「積極的ではないが聞かせた方がよい」26名(27%)、「聞かせたくない」52名(54.2%)であった。成人女子では、それぞれ27名(43.5%)、10名(16.1%)、25名(40.3%)、保育士では、4名(21%)、10名(52.6%)、5名(26.3%)であり、保育士が配慮しながら伝えていくことが必要であると考えていることがわかった。小山(2015)³⁵⁾は、現在出版されている昔話絵本『かちかちやま』10冊を取り上げ、絵本の形態・構成の特徴(頁数・文字数・文体等)、昔話の特徴(発端句、繰り返しのリズム、結末句)、再話の内容(場面別の文章表現)、描画表現(日本の原風景・農家や物の描かれ方・登場人物の登場回数や描かれ方等)の観点から比較を行った。赤津³⁴⁾の取り上げた『かちかちやま』も10冊のうちの1冊であった。小山は場面2として「ばあ汁と骨」の表現を取り出して比較しているが、10冊中5冊が絵も含めて表現されていなかったと報告しており、表現していた5冊においても、「ばあ汁と骨」の両方を表現しているものが3冊、誰が食べたかの表記については5冊それぞれ異なっていた。小山は、昔話が口承という性質上、語り手が再話者として対象者との関係の中で、省略したり、分かりやすい表現に変えたりして柔軟に語ることも可能であると述べている。小山の述べるように、昔話絵本は、口承とは異なり、文章や絵によりイメージが同一化されるという面はあるが、日本の原風景など現代では見かけられにくいものを視覚的に表現することで、文化を伝承していく役割があると考えられる。子どもの置かれた状況や発達状況を

考慮して、保育者が絵本を選択し、「教訓ものとして教育的に昔話を取り上げるのではなく、喜怒哀楽を含めた人間世界の営み、自然との共存など俯瞰的なとらえ方をして伝える必要がある。」(小山³⁵⁾, p. 17)

最後に「科学絵本」を取り上げる。子どものための科学絵本について、塚原(2018)³⁶⁾は、科学絵本を「絵と文が一体となって物語や主題を表現するために構成された本で、絵の連続性やページめくりの要素が効果的であり、主に自然現象を研究対象として、仮説をたて、実験や観察を行い、批判的検証をすることによって作り上げられた法則や理論などを伝える本」(p. 25)と定義し、科学絵本を5つの種類に区分し、各区分ごと4冊以上を例として挙げている。①文字なしの科学絵本で、例としては、『どうぶつのおやこ』(藪内正幸画, 1966)³⁷⁾, 『じどうしゃ』(寺島龍一画, 1966)³⁸⁾ 他。②絵に一連の連続性をもたせた科学絵本(絵巻物を本に仕立てたようなもの)で、『かわ』(加古里子作・絵, 1962)³⁹⁾や『地面の下のいきもの』(松岡達英絵・大野正男文, 1988)⁴⁰⁾ 他。③絵本のめくる要素をうまく取り入れた科学絵本で、『やさい』(平山和子作, 1979)⁴¹⁾, 『やさいのおなか』(きうちかつ作・絵, 1997)⁴²⁾ 他。④ストーリー性のある科学絵本で、『しずくのぼうけん』(マリア・テルリコフスカ作 ボフダン・ブテンコ絵 内田莉莎子訳, 1969)⁴³⁾, 『ふしぎなカニのハサミ』(松岡洋子文・松岡達英絵, 1970)⁴⁴⁾ 他。⑤全体として、絵や図を見て一定の筋の流れがある絵本。絵や図を工夫することで、よりよく科学が伝達されるもので、『たんぽぽ』(平山和子文・絵, 1976)⁴⁵⁾, 『じめんのうえとじめんのした』(アーマ・E・ウェバー文・絵 藤枝濤子訳, 1968)⁴⁶⁾ 他である。塚原によると、日本の子どものための科学絵本や科学の本は、国際的に見ても水準が高いという。こうした価値のある絵本を保育現場においても活用していくことが求められる。

7. おわりに

子どもに豊かな言葉の世界を環境を通して体験させ、子どもが自分で言葉を用いて表現したり、言葉を用いて他者と伝え合い、心を通わせることは、新しい幼稚園教育要領や、保育所保育指針、連携型認定こども園教育・保育要領でも重視されている。特に乳幼児期においては、絵本が重要な役割を担うことになると考えられる。保育者自身も豊かな言葉の世界に住み、子どもと共に言葉を使うことを楽しむことが求められるだろう。保育者養成課程においては、学生にいろいろな種類の絵本を知る機会を提供したり、保育における絵本の活用の仕方や、子どもの発達や置かれた状況に合わせた絵本選択のあり方などを学修する授業が必要となると考えられる。

筆者が担当する「臨床心理学」の授業は今年度後期を持って閉講となり、臨床心理学関連の授業も順次閉講となる。新しいカリキュラムにおいて筆者の担当予定科目の中で、絵本を教材として活用予定の科目は、「特別支援教育」「コミュニケーションの理論と実践」の2科目であり、それぞれ3年次、4年次開講の選択科目である。「臨床心理学」では、物語絵本を主として紹介してきたが、新カリキュラムでは、いろいろな種類の絵本を取り扱う予定である。特に、「特別支援教育」では、新しい幼稚園教育要領総則において改訂のポイント(文部科学省¹⁵⁾)とされているように、言葉の発達に課題のある子どもや、生活に必要な日本語の習得に困難のある子どもを対象とした指導に、「知識絵本」や「言葉の絵本」などを取り上げることが可能だろう。これからの保育者養成課程においては、学生自身が言葉を豊かにすることや、言葉を用いて心を通い合わせるコミュニケーション能力を身に付けることが重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 村瀬喜治・村瀬留美子 2013 絵本に学ぶ臨床心理学序説. ナカニシヤ出版.
- 2) 佐野洋子作・絵 1977 100万回生きたねこ. 講談社.
- 3) ささきまきさく・え 1973 やっばりおおかみ. 福音館書店.
- 4) 長谷川摂子作 ふりやなな画 1985 めっきらもっきらどおんどん. 福音館書店.
- 5) ラッセル・ホーバンぶん ガース・ウィリアムズえ まつおかきょうこやく 1966 おやすみなさいフランス. 福音館書店.
- 6) 本田真大 2017 幼児への読み聞かせを行う保育内容（言葉）の授業が幼稚園教諭としての資質・能力に与える効果. 北海道教育大学紀要教育科学編, 68, 1, 17-25.
- 7) 鈴木貴史 2016 保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題—保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から—. 帝京科学大学紀要, 12, 147-153.
- 8) ハンス・ウィルヘルム えとぶん 久山太市やく 1988 ずーっとずっとだいすきだよ. 評論社.
- 9) 峰本義明 2017 絵本の学びに対する学生の意識—『絵本探求』の授業実践を基に—. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 47, 1-12.
- 10) 杉本真理子 2016 保育学生の「絵本」に関する学びの深化—「保育内容の指導法（言葉）」における実践. 全国保育士養成協議会第55回研究大会発表論文集, 297.
- 11) 三好伸子 2017 学生の姿から考察する絵本の効果—保育者養成校授業でどのように使用するべきか—. 甲南女子大学研究紀要人間科学編, 53, 89-96.
- 12) 青嶋由美子 2015 保育系学生が読む昔話・伝説・神話—絵本100冊ノートから—. 豊橋創造大学短期大学部研究紀要, 32, 27-36.
- 13) 伊勢明子・吉村真理子 2017 保育者にとっての絵本体験の重要性—保育者の資質を高める絵本ノートの活用について—. 千葉敬愛短期大学紀要, 39, 449-455.
- 14) 伊勢明子 2018 保育者にとっての絵本体験の重要性（Ⅱ）—絵本ノートを活用した読み聞かせの取り組み. 千葉敬愛短期大学紀要, 40, 13-19.
- 15) 文部科学省 新幼稚園教育要領のポイント. (www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf)
- 16) 平山祐一郎 2017 絵本への関与と絵本認知度の関係について—保育者養成における読書教育の心理学的研究—. 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 4, 41-45.
- 17) 平山祐一郎 2018 絵本への関与と絵本認知度の発達的变化について—保育者養成における読書教育の心理学的研究その2—. 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 5, 1, 39-43.
- 18) 佐野友恵 2018 保育者志望学生の絵本体験に関する研究. 教育学研究論集, 13, 17-24.
- 19) 中川李枝子作・大村百合子絵 1967 ぐりとぐら. 福音館書店.
- 20) 筒井頼子作・林明子絵 1977 はじめてのおつかい. 福音館書店.
- 21) エリック・カール もりひさし訳 1976 はらぺこあおむし. 偕成社.
- 22) 藤岡久美子・伊藤恵里奈 2016 幼稚園における絵本の読み聞かせの選書の分析—3年間の記録から—. 山形大学教職・教育実践研究, 11, 59-68.
- 23) 片山ふみ・野口康人・佐藤賢一郎 2017 ベテラン保育士の絵本選定：絵本に対する価値観と出版社へのイメージに着目して. 読書科学, 59, 4, 198-209.
- 24) 吉村真理子・伊勢亜希子 2018 絵本による子どもの社会性の発達の促進—互惠性や、多様性への寛容さを育む—. 千葉敬愛短期大学紀要, 40, 389-398.
- 25) なかやみわ 1999 そらめくんのベッド. 福音館書店.
- 26) なかやみわ 2001 くれよんのくろくん. 童心社.
- 27) 八木義仁 2018 「保育内容の研究（言葉）」における読み聞かせの選書理由の傾向. 畿央大学紀要, 15, 1, 5-10.
- 28) 橋村晴美 2018 領域「言葉」における言語の感覚が養われる教育方法についての一考察—学生の絵本の選

- 書から見えてきたもの一. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究, 3, 2, 19-28.
- 29) 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説. (<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>)
- 30) 笠松美歩・上原宏・宇津呂武仁・齋藤有 2018 絵本レビューを情報源とする子どもの認知発達の反応の収集・類型化とそれに基づく絵本の分類. 知識と情報 (日本知能情報ファジィ学会誌), 30, 3, 581-590.
- 31) 是澤優子 2018 幼児の言葉を豊かにする教材としての昔話絵本の可能性: 大学生の物語理解の視点から. 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 5, 1, 3-10.
- 32) ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳 1965 三びきのやぎのがらがらどん. 福音館書店.
- 33) 小澤俊夫再話者 赤羽末吉絵 1988 かちかちやま. 福音館書店.
- 34) 赤津純子 2008 昔話を子どもに伝えることの教育的意義. 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 8, 151-161.
- 35) 小山祥子 2015 昔話絵本の再話と描画に関する比較研究—「かちかちやま」の場合—. 駒沢女子短期大学研究紀要, 48, 9-18.
- 36) 塚原博 2018 子どものための科学絵本—その定義, 科学絵本を書く観点, 種類について—. 実践女子大学文学部紀要, 60, 19-30.
- 37) 藪内正幸画 1966 どうぶつのおやこ. 福音館書店.
- 38) 寺島龍一画 1966 じどうしゃ. 福音館書店.
- 39) 加古里子作・絵 1962 かわ. 福音館書店.
- 40) 松岡達英絵・大野正男文 1988 地面の下のいきもの. 福音館書店.
- 41) 平山和子 1979 やさい. 福音館書店.
- 42) きうちかつ作・絵 1997 やさいのおなか. 福音館書店.
- 43) マリア・テルリコフスカ作 ボフダン・ブテンコ絵 内田莉莎子訳 1969 しずくのほうけん. 福音館書店.
- 44) 松岡洋子文・松岡達英絵 1970 ふしぎなカニのハサミ. 北隆館.
- 45) 平山和子文・絵 1976 たんばば. 福音館書店.
- 46) アーマ・E・ウェバー文・絵 藤枝濤子訳 1968 じめんのうえとじめんのした. 福音館書店.